

Wh 移動における Negative Polarity Item について
 Acerca de los términos de polaridad negativa
 en el movimiento de CU *)

石岡 精三
 Seizo ISHIOKA

0. はじめに

(1) で観察されるように、Wh 要素と定動詞の間に主語を含めた Topic 要素が生起する用例は、不適格と判断される。一方、Negative Polarity Item (NPI) (*nunca, nada*, etc.), あるいは Neg 要素 (*no*) が定動詞の直接左方に生起する用例において、この Topic 要素の介在が許容される話者グループの存在が確認される (2a-c)。(2b-d) のタイプに対して異なる判断を下す話者グループが存在する。本稿では、この相違を説明すると思われる論法が提示される。¹⁾

- (1) a. *¿qué el cartero trajo? (Toribio 1993:p.128) 'what did the mailman bring?'
 b. ¿qué trajo el cartero? (ibid.)
 c. *¿con quién a las cinco llegó Juan? (Inclán 1997:p.31) 'with whom did Juan arrive at five?'
- (2) a. ¿a quién Carmen *nunca/jamás* llama? (Inclán 1998:p.65) 'who does Carmen never call?'
 b. ¿a quién Carmen *nada* dijo? (Maldonado (p.c.); Demonte (p.c.)) 'who did Carmen say nothing to?'
 c. ¿a quién Carmen *no* llamó? (Inclán 1997:p.6) 'who didn't Carmen call?'
 d. *¿para quién nunca Carmen preparó un pastel de cumpleaños? (ibid.:p.43)
 'who did Carmen never prepare a birthday cake for?'

1. 判断分布

用例 (3) に関して、話者グループの分布 (4) が特定される。 $\alpha - \delta$ グループの存在が確認される。

- (3) a. ¿a quién *jamás* ofenderías tú con tus acciones? 'who would you never offend with your actions?'
 b. ¿a quién *nadie* ofendería con sus acciones? 'who would nobody offend with his actions?'
 c. ¿a quién Carmen *jamás* llama? 'who does Carmen never call?'
 d. ¿a quién Carmen *nada* dijo? 'who did Carmen say nothing to?'
 e. ¿con quién a las cinco *nunca* tomaste el té? 'with whom did you never have tea at five?'
 f. ¿a quién *nada* Carmen dijo? 'who did Carmen say nothing to?'
 g. ¿a quién *jamás* Carmen llama? 'who does Carmen never call?'

(4) 話者グループの分布 :

	(3a)	(3b)	(3c)	(3d)	(3e)	(3f)	(3g)
α . (Suñer (p.c.); Bosque (p.c.); Zubizarreta (1998)?)	ok	*	*	*	*	*	*
β . (Demonte (p.c.))	ok	ok	*	*	*	*	*
γ . (Inclán (1997))	ok	ok	ok	ok	ok	*	*
δ . (Maldonado (p.c.))	ok	ok	ok	ok	ok	ok	ok

2. Zubizarreta (1998)

Zubizarreta (1998) は、スペイン語の T が Syncretic Category であると想定する。つまり、T に Discourse-Based Feature (例えば, [+topic], [+focus], [+wh], [+neg]) が付与され、当該素性をもつ最大投射が Spec(T) へ移動する (Checking)。T の投射が繰り返し生成されるが、最大投射による当該素性に関する Checking は、一回に限定される (Zubizarreta 1998:p.117, 184)。これにより、(5a-b) の

非文性が説明される。例えば (5a) において, [+focus] NP (*las espinacas*) と [+topic] NP (*Pedro*) が生起する (T [+focus] と T [+topic] が生起する)。素性 [+focus] と素性 [+topic] の一方のみの Checking が適用されるため, 当該用例が不適格 (非文) と予測される。一方, (5c) における Adjunct NPI (*jamás, nunca, etc.*) は, Spec(T) 位置に基底生成される (これは, 素性 [+neg] に関する Checking から独立している) (Zubizarreta 1998:p.184)。これにより, (5c) の適格性が説明される。Argument NPI (*nada, nadie*) が Spec(T) に基底生成されることはない。これにより, (6a-b) の適格性と (6c-d) の非文性が説明される。

- (5) a. **las ESPINACAS, Pedro trajo (y no las papas)* (Zubizarreta 1998:p.103, (6a))
 ‘it is the spinach that Pedro brought (and not the potatoes)’
 b. **¿a quién nadie ofendería con sus acciones?* (ibid.:p.185) ‘who would nobody offend with his actions?’
 c. *¿a quién jamás ofenderías tú con tus acciones?* (ibid.) ‘who would you never offend with your actions?’
 d. **¿jamás a quién ofenderías tú con tus acciones?*
- (6) a. *nunca nadie llama* (Zubizarreta 1998:p.184) ‘no one ever calls’
 b. *nadie nunca llama* (ibid.)
 c. **nada nadie dijo* (ibid.) ‘no one said anything’
 d. **nadie nada dijo* (ibid.)

同様の論法は, (3b-g) をすべて不適格と予測する。Zubizarreta (1998) の論法は, 本稿で確認された話者グループ α の用例のみを説明可能である点において, 問題を内包するものである。更に, (6a) は問題を惹起する。(6a) は, Adjunct NPI (*nunca*) がより上位の Spec(T) に基底生成可能であることを物語る (Argument NPI (*nadie*) が, より下位の Spec(T) へ移動する)。Adjunct NPI (*jamás*) もまた, 当該位置に基底生成されと考えられる。その場合, [+wh] 要素 (*a quién*) と NPI (*jamás*) の位置関係が逆転した用例 (5d) が適格と予測されることになる ([+wh] 要素 (*a quién*) が, より下位の Spec(T) へ移動する)。しかしながら, (5d) は不適格と判断されると考えられる。

3. 仮説体系と Parameters

スペイン語の CP 構造として, (7) が想定される。素性 [+wh], あるいは [+focus] が Σ_1 に付与され, 順次 Agrs まで下方浸透する (8a)。Pol₁, あるいは Pol₂ に素性 [+topic] が付与される。この素性 [+topic] が下方浸透することはない (素性 [+topic] が付与された Pol₁ (Pol₂) は, Pol₁' (Pol₂') まで投射される) (8b)。Pol₁, あるいは Pol₂ に付与される素性 [+neg] もまた, Agrs まで下方浸透する (素性 [+neg] が付与された Pol₁ (Pol₂) は, Pol₁P (Pol₂P) まで投射される) (8c;9a)。同一の Pol (Pol₁ or Pol₂) に対して, 素性 [+neg] と [+topic] が同時に付与されることはない (9b)。

- (7) [CP [Σ_1 IP [Pol₂' [Pol₁' [Agrs' ... [VP]]]]]]²⁾

- (8) a. Σ_1 , assigned the feature ([+wh] or [+focus]), obligatorily transmits/percolates the feature involved successively down to Agrs.
 b. The feature [+topic], assigned either to Pol₁ or Pol₂, does not percolate down to Agrs.
 c. The feature [+neg], assigned either to Pol₁ or Pol₂, obligatorily percolates successively down to Agrs.
- (9) a. Pol₁ (Pol₂), assigned the feature [+neg], can project to Pol₁P (Pol₂P) (otherwise it projects to Pol₁' (Pol₂')
 b. The feature [+neg] and the feature [+topic] cannot be assigned to the same Pol (Pol₁ or Pol₂).

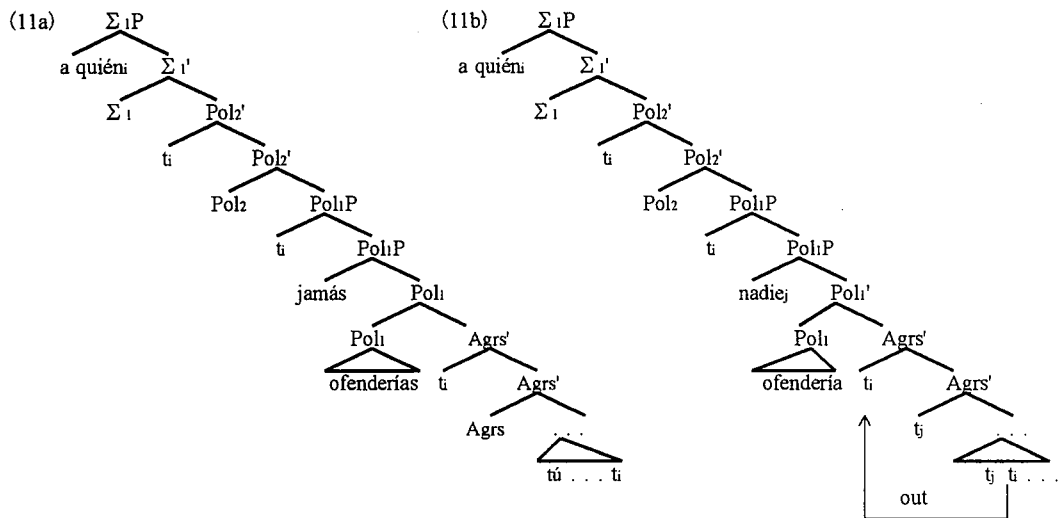
Contreras (1991) と同様に, Rizzi (1990) で提唱される Relativized Minimality を Adjunction Structure にも拡張する (10)。これは, 範疇 X の最大投射に最大範疇 YP が左方 (右方) 付加した位置に移動している場合 (あるいは, 当該位置に基底生成されている場合), 他の最大範疇 ZP が左方 (右方) 付加する移動を排除するものである。

(10) Extended Relativized Minimality (ERM):

- X antecedent-governs Y iff there is no Z, Z (X^a, A-Specifier, A'-Specifier, and Adjunct which is strictly adjacent to and in the same adjunction direction as X) such that
 (a) Z is a typical potential antecedent-governor for Y, and
 (b) Z c-commands Y and does not c-command X.

この前提により, (1a,b) の相違が説明される。(1a) において, Σ_1 に付与された素性 [+wh] は, 順次 Agrs まで下方浸透する。素性 [+topic] が Pol₁ (あるいは Pol₂) に付与される (当該素性が Pol₂ に付与される派生で考える)。この場合, Pol₁ (Pol₂) の最大投射として Pol₁' (Pol₂') が指定される。[+topic] NP (*el cartero*) は, Pol₂' に左方付加した位置へ移動する。[+wh] 要素 (*qué*) は, Agrs, Pol₁, Pol₂ の最大投射に左方付加した位置を経由して Spec(Σ_1) へ移動する。[+wh] 要素 (*qué*) が Pol₂' に左方付加した位置への移動は, ERM によって排除される (不適格と予測される)。主語 NP (*el cartero*) が基底生成された位置にとどまると考えられる (1b) では, この種の ERM 違反が起こらない (素性 [+topic] が関与しない)。

α グループの用例としての (3a) と (3b) に検討を加える。(3a) の適格性は, Adjunct NPI (*jamás*) が Spec(Pol₁) に生成されると想定することにより説明される (素性 [+neg] を付与された Pol₁ の最大投射として, Pol₁P が指定される)。当該 Adjunct は, それが基底生成された位置において, 素性 [+neg] に関する Checking の適用を受ける。[+wh] 要素 (*a quién*) は, Agrs, Pol₁, Pol₂ の Checking Domain を経由して, Spec(Σ_1) へ移動する。この移動が, ERM によって排除されることはない (派生構造 (11a))。



α グループの用例としての (3b) において、素性 [+neg] が Agrs まで下方浸透する（当該素性が Pol₁ に付与される派生で考える）。Argument NPI (*nadie*) は、Agrs' に左方付加した位置を経由して、Spec(Pol₁) へ移動する。[+wh] 要素 (*a quién*) もまた、Agrs' に左方付加した位置を経由する（派生構造 (11b)）。この移動は、ERM によって排除される（当該用例が、不適格と予測される）。³⁾

α 以外のグループでは、(3b) が適格と判断される。これらのグループにおいて、(11b) で観察された ERM 違反を回避する Strategy が存在することになる。ここで、Pol₁ (Pol₂) に付与された素性 [+neg] の下方浸透と、当該素性を付与された Pol の投射に関する Parameters を設定する (Adjunct NPI の生成位置に関する Parameter (12A) も並記する)。

(12) Parameters: ⁴⁾

- (A) [±] The Adjunct NPI can be base-generated also in Spec position of Pol₁, when the Spec position is available.
- (B) [±] The feature [+neg] assigned to Pol₁ or Pol₂ obligatorily percolates down to Agrs.
- (C) One of Pol₁ and Pol₂, if assigned the feature [+neg], can project to PolP, [±] and the other, not directly assigned the feature involved, can simultaneously project to PolP, with the feature [+wh], assigned to Σ_1 , percolating down to Agrs.
- (D) The Adjunct NPI can be base-generated in Spec position of Pol₁, [±] and Pol₂ with the feature [+wh], assigned to Σ_1 , percolating down to Agrs.
- (E) [±] The feature [+neg], assigned to Pol₂, obligatorily percolates down to Pol₁, with the feature [+wh], assigned to Σ_1 , percolating down to Agrs.

(13) Parametrization:

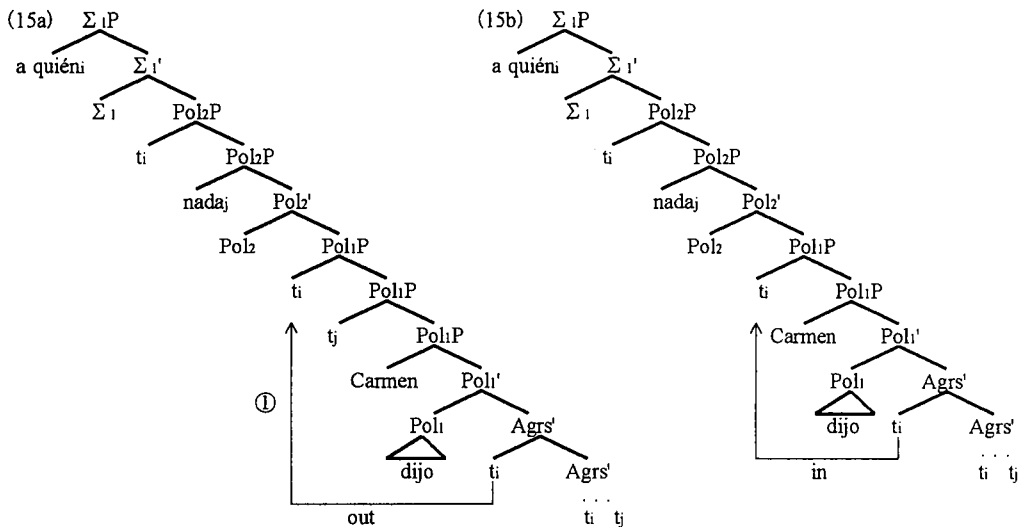
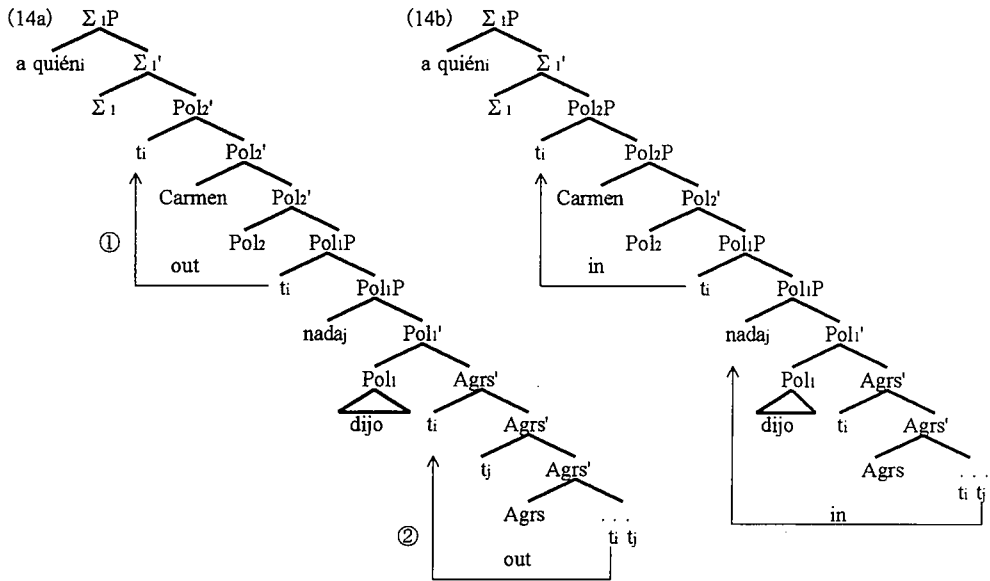
	α . Suñer (Bosque)	β . Demonte	γ . Inclán	δ . Maldonado
Parameter (12A)	+	+	+	+
Parameter (12B)	+	-	-	-
Parameter (12C)	-	-	+	+
Parameter (12D)	?	?	-	+
Parameter (12E)	+	+	+	-

$\beta - \delta$ グループにおいて、Pol₁ に付与・伝達された素性 [+neg] の Agrs への下方浸透が随意的に適用される。これにより、派生構造 (11b) で観察された ERM 違反が解消される。(3b) が適格と予測される。

$\alpha - \beta$ グループにおいて、(3c-e) はすべて不適格と判断される。素性 [+topic] と素性 [+neg] が、それぞれ Pol₂ と Pol₁ に付与される。[+topic] XP (*Carmen, a las cinco*) が Pol₂' に左方付加した位置へ移動する。NPI 要素 (*jamás, nunca*) は、Spec(Pol₁) に基底生成され、NPI 要素 (*nada*) は、当該位置へ移動する。 Σ_1 に付与された素性 [+wh] は、順次 Agrs まで下方浸透する。結果として、[+topic] XP (*Carmen, a las cinco*) と [+wh] 要素 (*a quién*) が Pol₂' に左方付加した位置へ移動・経由する。(3d) に対応する派生構造 (14a) において、[+topic] NP (*Carmen*) と [+wh] 要素 (*a quién*) がそれぞれ、Pol₂' に左方付加した位置へ移動、当該位置を経由する (①)。この派生は、ERM によって排除される。

一方、 $\gamma - \delta$ グループの用例としての (3c-e) は、適格と判断される。ここで、Parameter (12C) を導入する。これは、一方の Pol に素性 [+neg] が付与された場合、他方の Pol もまた PolP まで投射されるグループを想定するものである（素性 [+wh] が下方浸透する条件下で）。これにより、(14a) で観察された違反①が解消される。 $\beta - \gamma$ グループにおいて、Parameter (12B) が [-] と表示さ

れる点に留意されたい。Argument NPI (*nada*) が一挙に Spec(Poli) へ移動可能となるため、(14a) の違反②も解消される (派生構造 (14b))。



(3c-e) の適格性を説明する論法は、(3f-g) を不適格と予測する。これまで、Adjunct NPI (*jamás*) が Spec(Poli) に生成されると想定されている。よって、(3g) が生成不能となる (適切な派生として (3c) が指定される)。(3f) において、素性 [+neg] が Polz に付与される (素性 [+topic] が Poli に付与される)。この派生は、ERM によって排除される (派生構造 (15a))。[+wh] 要素 (*a quiéni*) と Argument NPI (*nada*) が PoliP に左方付加した位置へ移動する。 δ グループにおける (3g) の適

格性は, Adjunct NPI が Spec(Pol₂) 位置にも生成可能と想定する Parameter (12D) の導入によって説明可能となる(素性 [+wh] が下方浸透する条件下で)。Adjunct NPI (*jamás*) が Spec (Pol₂) に生成される。[+topic] NP (*Carmen*) が Spec(Pol₁) へ移動する (Parameter (12C) が [+] と表示される)。[+wh] 要素 (*a quién*) は, Agrs', Pol₁P と Pol₂P に左方付加した位置を経由して Spec(Σ_1) へ移動する。この移動が, ERM によって排除されることはない。 δ グループの用例としての (3f) は, 適格と判断される。つまり, 派生構造 (15a) における違反①を回避する Strategy が存在すると考えられる。

δ グループにおいて, Pol₂ に付与された素性 [+neg] の Pol₁ への下方浸透が随意的に適用されると考える (Parameter (12E))(これは, 素性 [+wh] が下方浸透する場合に発動する)。結果として, Argument NPI (*nada*) が Pol₁ の Checking Domain を経由する必要がない(派生構造 (15b))。この移動は, ERM によって排除されることはない。^{5) 6)}

4. 素性 [+affirm(ative)] の関与

以下の用例 (16) は, *siempre* (always) と affirmative particle (*si*) が生起する Wh Interrogative が Adjunct NPI が生起する用例と並行することを物語る。(17a-b) と (17c-d) で観察される相違は, 異なる話者グループの存在を示す。ここで, 素性 [+neg] に関して想定された仮説群 (8c, 9a-b) と Parameters (12A-C) を素性 [+affirm] が関与する場合にも拡張する (18)。⁷⁾

- (16) a. *¿a quién Carmen si llamó?* (Inclán 1997:p.6) 'who did Carmen indeed call?'
 b. *¿a quién Carmen siempre llama?* (ibid.:p.66) 'who does Carmen always call?'

- (17) a. *¿qué diarios siempre/nunca lee Juana?* (Suñer 1994:(53a); Bosque (p.c.))
 'which newspaper does Juana always/never read?'
 b. *¿qué siempre ordena Juan en este restaurante?* (Arnaiz 1992:(20a))
 'what does Juan always order in this restaurant?'
 c. **¿qué siempre canta Luis?* (Brucart 1993:(55a)) 'what does Luis always sing?'
 d. **¿qué siempre lee María?* (Torrego 1984:(4b)) 'what does María always read?'

(18) Parameters:

- (A) [+] (Some) adjuncts of *siempre* type can be base-generated also in Spec of Pol₁, when the Spec position is available.
 (B) [+] The feature [+affirm] assigned to Pol₁ or Pol₂ obligatorily percolates down to Agrs.
 (C) One of Pol₁ and Pol₂, if assigned the feature [+affirm], can project to PolP, [+] and the other, not directly assigned the feature involved, can simultaneously project to PolP, with the feature [+wh], assigned to Σ_1 , percolating downwards

(19) Parametrization:

	Brucart (Torrego)	Suñer (Bosque, Arnaiz)	Inclán (Maldonado?)
Parameter (18A)	—	+	+
Parameter (18B)	+	+	—
Parameter (18C)	—	—	+

Inclán (1997) において, (16b) の [+topic] NP (*Carmen*) は Spec(Pol₂) へ移動する。Aspectual Adjunct (*siempre*) は, Spec(Pol₁) に生成される (Inclán (1997) において, Parameter (18C) は, [+] と表示される)。結果として, (16a,b) に対して ERM を満足する派生が存在する。Suñer (p.c.) は, (16a,b) を不適格と判断する。これは, Parameter (18C) が [-] と表示されることにより説明される

(ERM 違反が惹起する)。同様の論法は、(17a-b) を適格と予測する。それでは、Brucart (Torrego) の用例 (17c-d) の非文性は、どのように説明されるであろうか。これは、Parameter (18A) によって、説明される。Brucart (Torrego) において、(18A) が [-] と表示される。つまり、Aspectual Adjunct (*siempre*) が Spec(Poli) に基底生成されることはない (Agrs よりも下位に生成されると想定する)。Poli (あるいは, Pol2) に付与された素性 [+affirm] が Agrs まで下方浸透するため、[+affirm] 要素 (*siempre*) が Agrs' に左方付加した位置を経由する。[+wh] 要素 (*qué*) もまた、Agrs' に左方付加した位置を経由する。この派生は、ERM によって排除される (Parameter (18B) が [+] である点に留意されたい)。

ここで、(17c-d) に対応する Exclamative について考える。(20a) と (20b) の相違に注目されたい。Exclamative における C(*que*) の生起が、派生を救う (基本的に、(20b) が適格と判断される)。Suñer (p.c.) では、この C(*que*) の生起如何にかかわらず、対応する用例が適格と判断される (20c)。

- (20) a. *¿qué cosas *siempre* dice María! (Brucart 1993: (55d)) 'what things María always says!'
 b. (?) ¿qué cosas *que siempre* dice María! (Brucart 1993: (56a))
 c. ¿qué cosas (*que siempre*) dice María! (Suñer (p.c.))

(17c) と (20a) は、並行する (双方とも、不適格と判断される)。それでは、C (*que*) が生起する (20b) の適格性は、どのように説明されるか。(17c) の非文性は、Agrs' に複数の要素が左方移動することによって説明された (ERM 違反)。C (*que*) の生起が、この ERM 違反を解消すると考えられる。Interrogative [+wh] と同様に、Exclamative [+wh] が Σ_1 に付与され、Agrs まで下方浸透する。(20b) の [+wh] 要素 (*qué cosas*) が、C (*que*) の左方位置 (Spec(C)) にある。 Σ_1 に付与された Exclamative [+wh] の C への上昇浸透した場合、C が *que* として実現されると考える。この上昇浸透は発動した場合、下方浸透が Poli まで適用されると想定してみよう。その場合、[+wh] 要素 (*qué cosas*) が Agrs' に左方付加した位置を経由する必要がなくなる。つまり、(17c) の ERM 違反が解消される。結果として、(20b) が適格と予測される。

5. 結び

複数の NPI が左方移動する用例を考える。判断の揺れが観察される (Laka (1990, 93))。(21a-c) は適格と予測される (Adjunct NPI (*nunca*) が Spec (Poli) に基底生成される) ($\alpha - \delta$ グループにおいて)。複数の Argument NPI が生起する用例の判断は揺れを呈する。不適格と判断される (21d) は、Poli に付与された素性 [+neg] の Agrs への下方浸透が義務的に適用されるグループ (α) の用例と考えられる。適格と判断される (21e) は、この下方浸透が随意的に適用される ($\delta - \gamma$) の用例として説明される。本稿の仮説群が妥当する場合、複数の Argument NPI と Adjunct NPI が左方移動した (21f) は、不適格と判断されることになる (検証の要)。⁸⁾

- (21) a. *nunca nadie/nadie nunca* llama (Zubizarreta 1998:p.184, fn.11) 'no one ever calls'
 b. *nunca nada* diré que te pueda ofender (ibid.) 'never will I say anything that could offend you'
 c. (?) *nada nunca* diré que te pueda ofender (ibid.)
 d. **nada nadie/ *nadie nada* dijo (ibid.) 'nobody said anything'
 e. *a ningún hijo mio nadie* le trata así (Laka 1990:p.122, fn.15) 'nobody treats any of my sons like this'
 [f. **a ningún hijo mio nadie nunca* le trata así] 'nobody ever treats any of my sons like this'

本稿第4節において、Wh Interrogative に対して想定された Parameter の一部が、Wh Exclamative に拡張された。しかしながら、両者の間には違いがある。C (*que*) が生起する (22c) と (22e) を適格と判断するグループ (例えば, Suñer (p.c.)) が確認される。Bosque (p.c.) は、C (*que*) の生起如何を問わず並行用例を不適格と判断する (22f)。本稿の (4) で確認されたように、Suñer (p.c.) と Bosque (p.c.) は同一の話者グループに属する (Wh Interrogative に関して)。

- (22) a. *¿qué cosas María dice? (Suñer (p.c.); Bosque (p.c.)) 'what things does María say?'
 b. *¡qué cosas María dice! (ibid.) 'what things María says!'
 c. ¡qué cosas que María dice! (ibid.)
 d. *¡qué bien Luis escribe! (ibid.) 'how well Luis writes!'
 e. ¡qué bien que Luis escribe! (ibid.)
 f. *¡qué bien (que) Luis escribe! (Bosque (p.c.))

本稿の仮説群は、(22a-f) を不適格と予測する。素性 [+affirm] が付与されていないため、Pol の最大投射として Pol' が指定される。[+topic] NP (*María, Luis*) が Pol' (あるいは、Polz') に左方付加した位置へ移動する。Exclamative [+wh] 要素 (*qué cosas, qué bien*) もまた、Pol' (あるいは、Polz') に左方付加した位置を経由する。この派生は、ERM によって排除される。Suñer (p.c.) に対して、C (*que*) がこの ERM 違反を回避するプロセスを想定すべきと考えられる。

この問題の解決には、Wh Exclamative の用例を更に収集・吟味することが必要となる。

註

- *) 本稿は、日本ロマンス語学会第 37 回大会 (愛知県立大学 1999 年 5 月 23 日) における口頭発表の一部を拡張・加筆したものである。
- 1) スペイン語の Wh 疑問における Subject Inversion を説明する種々の論法 (Torrego 1984; Contreras 1991; Toribio 1993; Goodall, 1992, 93; Suñer 1994, etc) が提案されているが、(2) を説明するものではない。Inclán (1997) では、(2a-d) が説明可能である。後述するように、(2d) のパターンを適格と判断する話者グループ (Maldonado (p.c.)) が確認される (紙面の都合上、これらの理論が内包する問題点に関する記述は割愛する)。更に、Zubizarreta (1998) では、(2a-c) の適格性が説明されない (本稿第2節)。
- 2) Contreras (1991) では、Agrs が [+lexical] と指定される (Agrs の最大投射として、Agrs' が指定される)。Agrs の最大投射として AgrsP を想定し、Spec(Agrs) に pro が生起する考えることも可能であろう (仮に、Agrs の最大投射として Agrs' を想定する)。Pol が常に Pol1 と Pol2 として繰り返し生成されるか否かに関しては、稿を改める。(8a) と (8b) は、石岡 (1996;97) でも前提される。
- 3) 仮に、定動詞が Pol1 に生成されると考える (Agrs に生成される可能性もあると考えられる)。Pol1、あるいは Pol2 に素性 [+neg] が付与された場合、neg (*no*) が Pol1 に生成されると考える (NPI (例えば、*nada*) が定動詞左方に移動した派生では、neg (*no*) が語彙的に実現されない点に留意されたい)。

- (i) a. no vio *nada* 'he didn't see anything'
 b. **nada* no vio
 c. nada vio

- 4) Pol₂ に付与された素性 [+neg] は、少なくとも Pol₁ まで下方浸透する。Pol₁ に付与された素性 [+neg], あるいは Pol₂ に付与され Pol₁ へ下方浸透した素性 [+neg] の下方浸透が随意的に適用される話者グループが存在する (Parameter (12B))。素性 [+wh] の下方浸透が適用される条件下で、Pol₂ に付与された素性 [+neg] の Pol₁ への下方浸透が随意的に適用される話者グループも存在する (Parameter (12E))。
- 5) 以下の用例において、素性 [+wh] の下方浸透が発動しない。よって、本稿の対象であるグループすべてにおいて、表示された判断が期待される。

- (i) a. *creo que *nunca* Juan canta (Laka 1993:fn.3) ‘I think that Juan never sings’
 b. **nunca* Venancio ve la televisión (Bosque 1980:p.32) ‘Venancio never watches TV’
 c. Venancio *nunca* ve la televisión (ibid.)

一方, Toribio (1993) は, Adjunct Negative Operator (本稿の NPI) が前置された場合の Subject-Verb Inversion が随意的に適用されると指摘する (p.149)。

- (ii) a. *nunca en su vida* había podido Juan/Juan había podido asistir ... (Toribio 1993:p.149)
 ‘never in his life had Juan been able to attend ...’
 b. *apenas* había llegado Juan/Juan había llegado cuando llamó Pedro (ibid.)
 ‘hardly had Juan arrived when Pedro called’

(1a-c) に関する Toribio の判断は不明であるが、仮に、素性 [+wh], あるいは素性 [focus] が下方浸透する条件下で、Adjunct NPI が Spec(Pol₂) に生成可能であると考え (素性 [+wh] の場合と同様に、Σ₁ に付与された素性 [+focus] は、順次 Agrs まで下方浸透する)。この論法が妥当する場合、*nunca en su vida* と *apenas* は、素性 [+neg] と素性 [+focus] が付与されると考える必要がある。更に、Parameter (12C) が素性 [+focus] の下方浸透下で発動すると想定した場合、(iii) が適格と判断される話者グループの存在が予見される (これに関する論考は、稿を改める)。

- (iii) a CARMEN *nunca* Juan/Juan *nunca* vio ‘it is Carmen that Juan never saw’

- 6) 各話者グループにおいて、neg (*no*) が生起する用例 (2c) のタイプは、(3b) に対する判断と同様と予測される (αグループにおいてのみ、不適格と予測される)。
- 7) *siempre* type は、Aspectual Adjunct に属す。*frecuentemente* (frequently), *constantemente* (constantly) もこの type に含まれる。*bien* (well), *rápidamente* (rapidly), *a fondo* (completely) 等の Modal Adjunct に対する素性 [+affirm] の付与は排除される。Modal Adjunct に対して付与されるのは、素性 [+topic] と考えられる。結果として、Modal Adjunct (Manner Adverb) が定動詞の左方に生起する Wh 要素移動の用例と、同じ条件下で更なる Topicalization が適用された用例は不適格と予測される (ERM によって排除される) (本稿の対象の話者グループすべてにおいて)。この予測は、以下の用例 (ia-b) によって例証される。(ib) の Modal Adjunct (*rápidamente*) に対応して Aspectual Adjunct が生起する用例 (ic) は、すべてのグループにおいて適格と予測される。
- (i) a. *¿qué diarios rápidamente/bien lee Juana? (Demonte (p.c.);Bosque (p.c.);Suñer (p.c.))
 ‘which newspaper does Juana read rapidly/well?’
 b. *María rápidamente cambia de opinión (ibid.) ‘María changes her opinion rapidly’
 c. María siempre/frecuentemente canta en la ducha ‘María always/frequently sings in the shower’
- 8) (21b) の *nunca nadie* の語順は、Adjunct NPI (*nunca*) が Spec (Pol₁) だけでなく、Pol₁P に左方付加した位置にも生成可能であることを示す。当該 Adjunct が Pol₁ の左方 Checking Domain に生成されると修正する必要がある。

参考文献

- Arnaiz, A. (1992). “On Word Order in Wh-Questions in Spanish.” *MIT Working Papers in Linguistics* 16, 1-10.
 Bosque, Ignacio (1980) *Sobre la negación*. Ediciones Cátedra, Madrid.
 Bosque, Ignacio (1994). “La negación y el principio de las categorías vacías.” Demonte, V. (ed.) *Gramática del español*, Centro de estudios lingüísticos y literarios, El Colegio de México.
 Brucart, Josef María (1993) “Sobre la estructura de SCOMP en español.” Viana D’Amadeu (ed.) *Sintaxi, teoria i perspectives*. Pagès Editors, Lleida.

- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1992) "A Minimalist Program for Linguistic Theory." *MIT Occasional Papers in Linguistics* 1.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Contreras, Heles (1991) "On the Position of Subjects." Rothstein, S. (ed.) *Syntax and Semantics* 25.
- Contreras, Heles (1996) "Economy and Projection." Parodi, Claudia, M. Saltarelli, and M. L. Zubizarreta (eds.) *Aspects of Romance Linguistics*. Georgetown University Press, Washington, D.C.
- Goodall, G. (1992). "On the Status of SPEC of IP." *WCCFL* 10, 175-182.
- Goodall, G. (1993). "Spec of IP and Spec of CP in Spanish Wh-Questions." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Inclán, S (1997) *Absence of Verb Inversion and Specificity in Peninsular Spanish WH-Questions*. Ph. D. dissertation, University of California, Los Angeles.
- Laka, Itziar (1990) *Negation in Syntax: On the Nature of Functional Categories and Projections*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Laka, Itziar (1993) "Negative Fronting in Romance: Movement to Σ ." J. Ashby, W., M. Mithun, G. Perissinotto and E. Raposo (eds.) *Linguistic Perspectives on the Romance Languages*. John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Olarrea, Antonio Antxon (1996) *Pre and Postverbal Subject Positions in Spanish: A Minimalist Account*. Ph. D. dissertation, University of Washington.
- Ordóñez, Francisco (1997) *Word Order and Clause Structure in Spanish and other Romance Languages*. Ph. D. dissertation, The City University of New York.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*. MIT Press, Cambridge.
- Stevens, Alison (1990). "The Structure of Negative Quantified Sentences in Spanish." *CLS* 27, 309-318.
- Suñer, Margarita (1994) "V-Movement and the Licensing of Argumental Wh-Phrases in Spanish." *Natural Language and Linguistic Theory* 12. 335-372.
- Toribio, Almeida J. (1993) *Parametric Variation in the Licensing of Nominals*. Ph. D. dissertation, Cornell University.
- Torrego, Esther (1984) "On Inversion in Spanish and Some of its Effects." *Linguistic Inquiry* 15, 103-129.
- Zagona, Karen (1988) *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Kluwer, Dordrecht.
- Zanuttini, Raffaella (1994) "Re-Examining Negative Clauses." Cinque, G., J. Koster, J-Y. Pollock, L. Rizzi, and R. Zanuttini (eds.) *Paths Towards Universal Grammar*. Georgetown University Press, Washington, D. C.
- Zubizarreta, María Luisa (1994) "El orden de palabras en español y el caso nominativo." Demonte, V. (ed.) *Gramática del español*, Centro de estudios lingüísticos y literarios, El Colegio de México.
- Zubizarreta, María Luisa (1998) *Prosody, Focus, and Word Order*. MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 石岡精三 (1996) 「スペイン語における Wh 要素移動—Focalization, Topicalization と Left Dislocation との比較から—その 1」 『ロマンス語研究』 29.
- 石岡精三 (1997) 「スペイン語における Wh 要素移動—Focalization, Topicalization と Left Dislocation との比較から—その 2」 『ロマンス語研究』 30.